

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷四十第

行發日一月一年一十正大

マルクス氏餘剩價值説の評論	法學博士 田島 錦治
我邦の所得税を論ず	法學博士 神戶 正雄
奴隸制と賃勞働制	法學博士 河上 肇
累進税の根據に就いて	法學博士 小川郷太郎
植民政策上より觀たる委任統治	法學博士 山本美越乃
小作制と小作法	法學博士 河田 嗣郎
社會の團結の減衰	文學士 高田 保馬
海運に於ける競争と獨占	法學士 小島昌太郎
舊尾張藩に於ける地割制度	農學士 奥 田 彥
財産税と國富統計	法學士 汐見 三郎
開城簿記の起源に就て	法學士 大森 研造

開城簿記の起源に就いて

大 森 研 造

開城簿記法は一に四介松都治簿法とも云ひ、主として朝鮮の開城商人が自己の會計を整理するために使用する特殊の簿記法であつて、我國在來の大福帳制度なぞとは同日の論でなく殆んど今日の洋式簿記と異なる所がない程進歩したものであるが、その貸借の觀念、仕譯の原理、勘定科目の設定、帳簿の組織種類並に決算手續等に就いては別に稿を改めて紹介することとし、茲には開城簿記法について最も興味あり且つ半島學術界の一疑問である所の其起源に就いて多少の考察を陳べて見たいと思ふ。

註の一、現在朝鮮に於ては四種の簿記法が行はれて居る。即ち其の一は銀行其他新興の商社が採用する所の洋式簿記法であつて、二は開城商人の用ふる開城簿記法、(但し開城に於いてのみならず、京城の鐘路、釜山、大邱、仁川等に於ても開城商人の經營する商舖に於ては凡て此簿記法に依つて會計を整理して居る)、三は小商人の用ふる内地の大福帳式の朝鮮式簿記法、四は此の朝鮮式に開城式を加味した折衷式簿記法である。

抑も開城簿記の起源に就いては從來種々の口碑傳説が存する、その中の第一は開城簿記法は高麗の昔に創始せられたものであるとの説であつて、第二は高麗の末斯李朝の始に開城商人が發明

したとの説、第三は今より數百年前開城商人が平安道より傳習し其後幾多の改善を加へて今日に至つたものであると云ふ説、第四は耶蘇敎の朝鮮傳來と共に其宣敎師が洋式簿記を翻譯して之を開城商人に傳授したものだとの説である。そこで以上の四説中果して孰れが正しいか、或は四説とも凡て間違つては居ないかに就いては、文献の徵すべきものもなく又舊記古帳の殘存するものがないから遽にその眞否を裁斷することは出来ないが、若し第一説の如く高麗時代に於て既に現在の如き簿記法が存在してゐたとするならば、それは會計學界の由々しき大事であつて、今日複式簿記法の濫觴は十四世紀中葉以後の伊太利の自由都市であると云ふ通説に動搖を來たし、複式簿記法の發生地は伊太利の自由都市に非ずして朝鮮の開城なりと云ひ得ることゝもなり、啻に朝鮮文化の誇とするに足るのみならず、世界會計史上にも一大變革を來たすことゝなるのである。

乍併元來如何なる學術制度と雖も偶然に發展進歩するものではない。必ずやその由つて來る原因がなくてはならぬ。例へば今日の洋式簿記法が十四世紀の中葉以後伊太利の自由都市に發生したのも其當時の四圍の事情并に人民の心理状態が自然に會計制度の進歩發展を促すやうに出來て居たからである。即ち中世紀の初半は所謂ゲルマン人の侵略、政敎兩權の衝突、封建制度の政治的分裂等があつて、古き文化國民の凡ての無形的勞作の果實を破壊し去り、商業及交通は勿論藝術科學等も總て未開墾のまゝ遺棄された、隨つて會計組織の如きも永らくの間發達し得べき

適當の土地を見出し得なかつたが、南北商業交通の互市場たる伊太利の都市共和國の勃興と共にルネサンスの曙光は茲に輝き初めて文學美術の精華を發揚したるに止まらず、商業も亦頗る隆盛を極むるに至つた。詳言すれば當時會計制度の發展に物質的衝動を與へたものは商業殊に銀行制度の大なる發展と秩序正しき財政を有する民主的國家の成立とである、蓋し伊太利に於ては早くから銀行制度發達し、世界最古の銀行と稱せらるゝヴェニス銀行は既に一一五七年に設立せられ、十四世紀にはフロレンスに於けるメジシ家の銀行が財政及商業の中心となり、一四〇七年にはゼノア銀行が設立せられた、斯く銀行が複雑なる業務を營み各種の帳簿を記録する必要上整然たる會計の記録を要求するに至り、茲に會計の技術に大なる進歩を見るに至つたのは疑ひのないことである、之と同時に此時代に會社組織の共同企業の利益なることが認めらるゝに至り之に關する特殊の發達を助長したことも看過し得ないのである。次に會計制度の形式的形成に貢獻した所のは印度亞刺比亞の記數法の輸入である、蓋し此頃に至る迄學者殊に天文學者を除く外は一般に羅馬數字を使用せしが Leonardo Bonacci の Liber Abaci (一一〇二年)と云ふ書物に依つてアラビア記數法が始めて伊太利に傳へられ、各種の會計に之を使用するに至つた。尙此外當時活字が發明せられた結果印刷術が非常に進歩したこと及數學の發達隆盛等も預つて大に力があつた。以上述べたるが如き外界の物質的條件と彼等の旺盛なる營利心が結合して會計制度の發達

に著しき刺戟を與へ、遂に數學の Equation の原理を應用して今日の如き完全なる複式簿記法の發生を見るに至つたのである。是に由つて觀るも開城簿記法に就いても同様にその起源に關する諸説の正否を檢査するに當つては必ずや其當時の一般文化并に心理狀態に就いて精密なる考察を遂げ然る後に論斷すべきものたるや言を俟たないのである。此意味に於て聊か迂遠の感はあるが余は讀者と共に暫く朝鮮の古き歴史に遡つて高麗の昔に遊び其當時の世相并に人心の概況を一瞥しつゝ諸傳説の當否を裁決して見たいと思ふ。

二

今を去る約一千年の昔、本朝にては延喜の帝、精勵治を圖り寒夜御衣を脱いで民の凍餒を憐はせられ世は極めて太平に頌聲道に充つる時に當つて、朝鮮半島の天地には腥風か吹き凄んだ、即ち新羅は積衰の餘漸く瓦崩の勢を成したが、此時弓裔は鐵圓(江原道鐵原)に據つて國を泰封と號し、甄萱は完山(全羅道全州)に據つて後百濟と稱し各覇を争ふて恰も鼎沸の如き有様であつた。爰に松獄山下の一布衣王建は父子共に弓裔に歸し暫く裔の幕下に馳驅して居たが、資性寛厚にして濟世の量あり、衆心を得て遂に弓裔の猜暴放縱にして將士の心を失ひ斧壞に逃れて農民の殺す所となるに迫んで推されて王となり、國を高麗と號し都を松獄山の陽に定め、全く半島統一の業を大成した、王建は即ち高麗の太祖であつて松獄は今の開城である。太祖王建の國を肇むるや毅

然として大國に頼らず孤拳を揮つて千年磐根の新羅の勢力を掃蕩し、新進勃興の弓裔甄萱を一蹴して高麗の天下を築いた、即ち盛徳無比の英雄ではあつたが深く佛に歸依し、僧道説の圖讖を信じて國家の大業は必ず佛法加護の力に資るものとなし、又僧利言海麟忠湛等に師事して事大小なく彼等に諮問して然る後に政治を行つた、されば歴世靡然として三寶に惑溺し、定宗は圖讖を信じて都を西京に遷し、光宗王は佛を崇拜したる餘り民財を竭くし、顯宗王は藏經道場を宮中に置き崇法、普願、相華等の諸寺に戒壇を設け、文宗王は興王寺を建て王子二人を祝して僧となし屢々三萬僧に供養した、其結果は十七世仁宗恭孝王の朝に於ける妖僧妙清の變となり、或は二十六世忠宣王五年には妖僧曉可出で、妖術を以て士女を街惑するあり、或は三十一世恭愍王の朝には辛屯の亂ありて國力日々に萎微し士民益々佚樂に流れ、遂に天命は高麗を去るに至つたのである、されば後世からは高麗遂に佛に亡ぶとの讖を蒙つたが、然し一面に於て、半島上下三千年、建築美術工藝の發達せしことは當代に及ぶものなく、現存猶全道各所に殘存する寺院を始め其他注目に値する建築及製作物等の多くは當時の遺物であつて、佛教は高麗を亡すの一動機であつたと同時に光輝を千歲に放つの機會を與へたのである。

當時開城の人口は約壹百萬と稱せられ、海岸迄四里の間大商小賈軒を並べ、商業極めて繁榮して金融財政の中心地となり實に文明中樞たるの觀があつた、即ち太祖即位後六矣廩の前身たる

市塵を開城に立て、坊里を辨せしめ、成宗十五年には鐵錢を鑄造した。斯の如き美術工藝の發達殊に商業取引の繁盛は遂に進歩したる記帳法を發明せしむるに至つたのであると云ふのが第一説の論據である。然り高麗時代に於ては各種の美術工藝大に發達し文運の顯る見るべきものがあり、商業も亦市塵の設立、鐵錢の鑄造等があつて、後世の人をして實に朝鮮の文明は百濟に芽して新羅に花咲き高麗に實れりと迄叫ばしむるに至つたのであるが、今少しく仔細に之を考察すれば餘程誤謬があるやうに思はれる。先づ當時の開城の有様并に交易に關して信賴し得べき高麗圖經を繙いて見るに、當時の坊市の有様を叙して曰く、「王城本無坊市、惟自廣化門、至府及館皆爲長廊以蔽民居時於廊間榜、其坊門曰永通曰廣德曰興善曰通商曰存信曰資養曰孝義曰行遜、其中實無街衢市井至有斷崖絕壁蔡芥繁、蕪墟不治之地、特外示觀美云耳」とあり。又貿易篇には、「其俗無居肆惟以日中爲墟、男女老幼官吏工伎各以其所有用以交易、無泉貨之法、惟紵布銀瓶以其直、至日用微物不及匹兩者則以米計鎰銖而償之、然民久安其俗自以爲便也」とある、是に由て觀るも當時開城の人口百萬にして大店小舗櫛比して商業の殷賑を極めたと云ふ俗説は信じ難い、殊に市塵が設立されたと云ふも之は只物品收稅制度の下に於て必然起る所の王室の需給に應すべき一種の御用商人的店舗機關たるに止まり、一般人民を顧客とするものに非ざること疑を容れない、又宋錢の輸入及鐵錢鑄造の企があつたと云ふも、之も廣く一般に流通せず多くは一種の商品と

して取扱はれ、交換の媒介物としては依然として紵布若くは米が重要な地位を占めて居たのである、斯の如く尙自足經濟の域を脱しない當時に於て、貨幣經濟信用經濟を前提として完全せらるべき進歩せる會計制度の發生を望むも得られないのは瞭かである。蓋し經濟生活の技術はそが社會的要件 (Technik als Element des sozialen Leben) たるに於て始めて意味があり交通經濟を前提としてこそ非常に驚くべき進歩を遂ぐることを得るものであつて、單に技術其物としては徒らに年所を経るとも決して其れ自體に於て著大なる進歩發達の動源を見出すものではない。加之高麗時代の文化は朝鮮史上に於てこそ燦爛たる光輝を發したるが如き觀あるもこれとて勿論相對的の話である、蓋し高麗の文藝制度は殆んど全く支那(宋元)より輸入した外來文化であつて、高麗獨特の發達進歩を見たものは殆んど無いと云つても好い位である。例へば現今賞翫せらるゝ所の高麗燒の如きも素より其技術は宋から傳へたものであつて唯藥品陶土其他の都合でかゝる立派なものが出來たと云ふに過ぎない、而かもこれとて僅かに王室附の二三名工の製作にかゝり其技術普及の範圍は極めて狭小であつた。簡言すれば高麗の文化は外來文化 Exotische Kultur であつて、寧ろ啻に文藝のみならず制度迄も支那から輸入した點が高麗時代の特徴である。隨つて一部人士の傳ふるか如き當時の文化隆盛の必然的歸結として今日の如き開城簿記を創始せしむるに至つたと云ふ説には疑を挿まざるを得ないのである、加之朝鮮に於て最近に至る迄數學が天地間の秘密を握

る極めて神秘的の智識として取扱はれ、之を以て吉凶を卜し疾瘡を醫するの具に使はれて来たことに想到するならば、かの數學の等價方程式を基礎として成立する複式簿記法が高麗の昔に創始されたとは吾人の信せんと欲しても信じ得ない所である。

三

次に第二説であるが曩にも述べたやうに、高麗は太祖王建以後世々の國王は太祖の遺訓に依り、或は宮中に祭壇を設け、或は國王自ら寺院に外幸して遊悠逸樂に耽り、八關會百座會の如き嚴肅なるべき教海の機關も高麗の末葉に至つては君王飲宴遊樂の機關と化し風俗壞廢の源泉となつた、加之保護に忸れたる僭倂は宮中府中を攪亂し都鄙を横行して誑姪度なきの有様であつた。此時に當つて西には朱元璋の中原に蹶起して大明と號し北元と争ふあり、南には倭寇猖獗を極め、北には紅巾の賊起り又女眞の邊陲を窺ふありて内外頗る多事であつた、時に高麗の一武將李成桂なるものあり慄慄にして能く戦ふ、即ち先づ北女眞を剿討して雙城等の地を回復し、又紅巾の賊を開城に攻めて奇功を奏し、尋で其將李豆蘭等と共に倭寇を雲峯善州等に討つて之を掃蕩し、又能く親元派を抑制して大明に附服し西方の廟慮を絶ち、かくして武威嚇々百僚を凌駕して樞機を掌握するに至つたが、當時武人輩は李成桂の將略を敬慕してその下に在つて功業を爲さんと欲し、圍隱先生鄭夢周一派の文臣は程朱の性理を主奉しあくまで理義を重じて必ず王氏の後を存せんと欲し

た、こゝに於て彈劾上奏は互に提出せられ、李穡以下の重臣皆放逐せられ、ひとり鄭夢周その徳器を以て猶ほ朝に立ち成柱と相並んで隱然兩堂の魁たるの觀があつたが、李成柱は遂に夢周を善竹橋畔に斬り、恭讓王の四年遂に武權を擁して主家を覆没し、恭讓王を原州に放ち三年の後之を殺逆し都を今の京城に移して李朝五百年の基礎を作つた。李成柱は即ち韓國の始祖太祖高皇帝である。

如斯李成柱は一介の武辨より起り東伐西討一時に人心を收攬して遂に高麗の天下を奪つたが曾て鄭夢周等に依つて養はれた大義名分の士は李氏の大道を憤り無道の臣たることを肯せず、或は白晝笠を被りて幽谷に隱逃し、或は李朝の秩録を食むを潔とせずして杜門洞不朝覬等に遁避して快々として育英に從ひ、或は俱に李朝の天を戴かずと稱して邊疆に遁れ或は明に走つた者もあつた、然し高麗の遺臣の大多數は此時斷然仕官の念を斷つて中人又は常民に降り、朝衣官服を脱ぎ棄て、前垂を掛け、笏や戈を持つ手に算盤を握つた、かくして政治的欲望を棄て新らしく物質的新生命を開拓せんとして立つた彼等は、開城を中心に海州白川の間に散在して鎗録に身を委ねた、これが所謂開城商人の起りである。開城商人の起源が右に述べたやうな理由からだとしたならば、其意氣込に於て初から日本内地の商人などは雲泥の相違がある、即ち彼等の生命とする所は唯營利觀念の一つあるのみである、即ち彼等は或は開城海州白川の間に、或は貨祿商となつて半島の各地に行商し、不撓不屈あらゆる辛酸を嘗め拮据營々奮闘した結果今日雞林八道到

る處に大勢力を有する所謂開城商人の地盤なるものを開拓したのだとも見られ得る。随つて彼等が熾烈なる營利的精神を満足せしむる必然の結果として、其資産負債損失利益を闡明するに足るべき整齊完備せる收支計算の方法を案出したのであると想像し得ないことはない。これ第二説を主張する者の主たる根據である。

乍併以上の論據は一應首肯し得るが如きも尙一層深く研究する時は幾多の誕妄偽作の分子が紛飾されて居るのである。先づ李成桂が武強を擁して主家を一推の下に覆没し、賢臣を慘殺し君主を殺逆したことは確かに大義名分の人士をして慷慨悲憤せしめたには異ひない、例へば高麗史記には「高麗の禮儀判書金澍明に如いて節を賀し還つて鴨綠江に到り李太祖の開國を聞き書を夫人柳氏に寄せて曰く、忠臣二君に仕へず吾れ江を渡るも其身を容るゝ所なしと其朝衣及び靴を送り以て信となし還つて明國に去れり」とあるを見てもその一斑を窺ひ得るが、辛旽の亂鄭夢周の斬殺等に就ても正史と傳説との間に非常な錯誤があるのみならず、かの杜門洞の事蹟の如きも全く虚構の誕言である。即ち俗傳に依れば杜門洞は高麗の遺臣曹義生以下林先味孟某等七十二人李朝の治に遵はず鎖門節守して憤死を遂げた所であると稱して居るが、今西龍氏の朝鮮書籍解題に依るも、此は全く地名に附會して曹義生の八世の孫と稱する曹臣俊が虚構せし妄説であることが判る。又開城商人の起源に就いても之を高麗の遺臣と政變との關係に求むるのは餘りに穿ち過ぎた

議論のやうに思はれる、開城の人士が李朝に反感を抱いて居たとは後世の偽作であつて開城商人の發達もこれを市塵又は人蔘の販賣に求むるが穩當ではないかと惟ふ。論者或は曰はん然らば市塵の設立、人蔘の販賣等よりして開城商人が特種の簿記法を當時案出したのではないか或は又人蔘商人が支那内地より傳習したものではないかと、然し高麗朝の始めに於て市塵の設立を見たとは云へ此等市塵は單に官府の貢進物の賣買を業とする御用商人の類であつて未だ一般人を相手方とする程度に發達しなかつたことは文献に徴しても瞭かである。又人蔘は古くより朝鮮特有の産物として支那に輸出せられ、かの三國史記(冊府元龜)にも「新羅聖德王三十三年春正月獻小馬兩匹狗三頭金五百兩銀二十兩布六十四匹牛黃二十兩人蔘二百斤……」又「遺王子蘇判金胤等入唐謝恩兼進奉馬二匹玃金一百兩銀二百兩牛黃十五兩人蔘一百斤……」とあるが然し最近に至る迄は其産出額も極めて少なく之が販賣の如きも高麗時代に於ては主として當時支那交通の要路に當つて居た碧瀾渡又は開城に於て直接支那商人に賣却したものである、従つて人蔘商が支那内地に出掛ければ地から特種の簿記法を傳習し來つたとは想像し得ない、殊に開城に於ける商人が如何に營利の觀念に鋭く恰も猶太人の如く物質的方向にのみ不屈の活動を開始したとは云へ朝鮮歷朝の苛斂誅求主義の暴政は彼等商人をして自由に活動せしむるの餘地を與へなかつたのである、唯開城が他に比して幾分商業の盛であつたのは、一は李朝が高麗遺臣の懷柔策として一は舊都たるの故を以て他

よりも比較的暴壓手段の緩漫なりしに因るものと思惟するのが穩當である。従つて高麗末期の政變に聯想して起りし開城商人の起源説に開城簿記の起源を求むるが如き第二説は遽に信じ難いのである。

四

次は第三説たる今より數百年前開城商人が平安道より傳習したとの説であるが、平安道は現今に於ても昌城、溟川、宣川、慈城、楚山、厚昌、秦川、渭原、靈山等の諸金鑛があつて多量の鑛金又は砂金を産出して居る如く古くから金を産出して居た、従つて密貿易は相當に行はれてゐたが、平安道に特に商業が盛んであつた形跡はない、且つ高麗朝李朝の政策は共に平安道を可成的貧困の状態に置くの方針を採り官吏採用をも避けたのである、蓋し平安道は人心浮薄にして事大思想に富み支那の勢力盛なる時は直ちに支那に從屬するから平壤以北に對しては殊更に強壓手段を施したのである、従つて商業の發達する餘地はなかつた。但し朴趾源の熱河日記を見れば、義州の商人(特に灣商と云ふ)は古くから朝鮮の使節に隨伴して宋元明等に入込んだやうであるが、彼等の間に特に記帳計算の發展せし痕跡を見出し得ないのである、又彼等の往來せし支那が現今に至るも尙單式簿記の域を脱しない極めて原始的の記帳法に依つて居るのを見ても、彼等灣商が支那から完備せる簿記法を移入したとは信ずることを得ない、よし百歩を譲つて當時支那の簿記法が相當に發達して居て之を灣商が移入したとするならば、開城よりも寧ろ義州に於て其痕跡を存すべき筈である、然るに今日義州に於て毫もその形跡なきを以て見ても第三説の信賴し得ないこと

が明瞭となる。

最後に耶蘇教傳來と共に宣教師が洋式簿記法を翻譯して之を開城商人に傳へたと云ふ第四説であるが、之れも餘程の詮索を要する。蓋し朝鮮には相當古くから耶蘇教が傳はつて居た即ち彼等は耶蘇教を西學と稱し支那に留學して習つたものであるが、然し彼等流學生の巢窟は京城又は開城ではなくして忠清道の古阜であつた、宣教師が初めて半島に入つたのは Griggs 氏の *Corea of the Hermit Nation*. 1902 に依れば西曆一七九一年二月であつて葡萄牙人 Jean dos Remedios を以て嚆矢とする、然し其隆盛を見るに至つたのは明治十四五年以後のことである即ち舊韓國と歐米各國との間に通商條約を締結して條約制限地域を限り布教の自由を得てから各國競ふて宣教師を派遣して布教に従事せしめたのである、それは兎に角として、Remedios 以來今日迄約百三十年間に於て果して何年頃何人が洋式簿記法を翻譯して之を開城商人に傳へたかに就いては全く文献の徴すべきものがないから判然しない、然し若し耶蘇教宣教師が翻譯して之を開城商人に傳へたものとすならば、其記帳が現金仕譯法の形式を採つて居る點に於て、今日の複式簿記法に於ける現金仕譯式が最近に考案せられたるに徴しても極最近のものであると推斷し得るのである。

そこで最後に現に残存せる商業帳簿の實際に就て諸説の眞否を検するに、余が開城の舊商家全在瑾及開城社から得た帳簿について見るに、大正二年以後のものは頗る完備したものでその内容は殆んど複式簿記法に等しいと云つても好い位のものであるが、光武玖年即ち今より約二十年前の帳簿は其内容に著しき相違がある、即ち貸借を表はすには前者と同じく、入、還給、捧次、還

上の四記號を用ゐるが、其取引の相手方を人は勿論人以外の物又は事實(損益)にも人格を與へて人同様に仕譯する所謂複式簿記法の特徴たる擬人法は既に此帳簿に於て發見し得ないのである。更に遡つて道光二十九年の帳簿(今より七十三年前)を検するに全く人名勘定のみであつて其仕譯帳方法等殆んど我國の大福帳と大差がない。由是觀之、唯其帳簿の裁綴種類表題等の多少類似せる所から、其内容の如何を審査せずして、開城商人間には古くより現今の如き複式簿記法に酷似する完全なる簿記法存在せりと輕信して之を他人に吹聴し、他人は更に之を他人に傳へ、其間に或は高麗時代の文藝の隆盛、高麗末期の政變に聯想して起りし開城商人起源説或は義州灣商の活動等の諸事情が之に纏綿して蒼然たる古色を帯び來り、一波萬波遂に今日の如き誕言妄説の流布を見るに至つたのであらうと思ふ。

余嘗て恰も之に類似の事實を見聞したことがある、それは慶昌道古迎日に就いての傳説である、迎日は一に延日とも書き新羅の舊都金城(現在の慶州)の東方海岸に沿ふ一小都であつて、新羅時代には斤島支縣又は臨汀と云ふて居たが高麗朝に至つて初めて迎日と改めた、この迎日の迎と日との二字が妙に日本人の感情を動かして、此迎日こそ昔日本と新羅との交渉地であつて、神功皇后三韓征伐には此地に御上陸遊ばしたのであらうと惟思せるに至り、その憶測を某日本人が一朝鮮人に傳へし處、此物語が土人間に在ること兩三年にして忽ち古來よりの口碑なるが如き古色を帯び來り、此迎日の地へ太古日本の強き女王上陸せりとの説が一般土人間に普及するに至つた、之を傳へ聞きし斯界の學者達は素より出所を怪しみながら彼地に到りて其傳説の根源を順次に探究

せし結果右の事情が明白したと云ふことがある。之と同様に朝鮮に於ては有形の物も無形のものも數年にして忽ち古色を帯ぶることは其例に乏しくないので之は朝鮮の研究者にとつて最も注意を要すべき點であつて開城簿記の起源の如きも多分は此迎日の類でなからうか、曾て福田博士も云つた如く、朝鮮人は順應を基礎として活潑々地の活動と努力とを喚起すべき欲望の強度を有しなかつたのである、既往に於ける朝鮮の學術文藝及商業の程度は今日開城簿記に存するが如き整齊完備せる會計制度を創始せしむるには餘りに幼稚であつた、貧弱であつた。乃ち吾人は只開城に於て比較的他也よりも早く會計簿記が發達してゐたと云ふことは或は想像し得ないこともないが、今日の所謂開城簿記に於て見るが如き完備せる會計方式が或は既に高麗時代より或は李朝の初期に於て開城商人に依つて案出せられたと云ふ説。惹いては高麗時代に複式簿記ありと云ふ説の如きは到底之を認むることが出来ない、否な開城簿記の如きも矢張一般の學術工藝等と同じく外來的文化 (Exotische Kultur) であつて、而かも現に残存せる古帳から推しても正確なる年代は判明しないが極く最近のものであると推斷し得るのである。

— 以上は素より余の一家言であつて嚴正精緻なる考證と研究とを經來つたものでないから、僅々の見聞に止まるの嘲は余の甘じて受ける所である、只之か導因となつて後日一層深く研究する人土の出で、或は殘存する舊記古帳に依り、或は信賴し得べき文獻に據つて其反證を示され、誕言妄説多き朦々昏々たる半島學術界に一つの光明を投下せらるゝなれば本稿の目的は概ね達し得られたのである。(完)